

世の光、イエス ヨハネによる福音書 8:12-16

1. イエスはまた彼らに語って言われた。「私は、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中をあゆむことがなく、いのちの光を持つのです。」(8:12)
 - a. これはイエスの2度目の「私は○○です」という宣言である。最初の宣言は「私はいのちのパンです(ヨハネ6:35、48)。」であった。「私は○○」という表現が特別な意味を持つ理由は、神がモーセに現れた時「『私はある』という者である」と言われたからである。
 - b. イエスが「私は世の光です」と言われたのは、ただ啓示をもたらすすぐれた教師であるというだけでなく、イエスご自身による神性宣言であった。
 - c. イエスは、ご自身に従う者には二つのことが起きると語られる。ここで注意すべきはただイエスのことを知っているだけでなく実際に付いて行く者のことを言っている。二つのことというのは「決してやみ(悪、絶望、欺き)の中を歩むことがない」、そして「いのちの光(神とつながること、真理、etc.)を持つ」ことである。繰り返すがこれらはイエスが単に良い先生だと言っている人たちではなく、神の子だと認めている人たちに対しての宣言である。
2. そこでパリサイ人はイエスに言った。「あなたは自分のことを自分で証言しています。だから、あなたの証言は真実ではありません。」(8:13)
 - a. イエスを批判する者たちが主張したのは、モーセの律法によればある証言が真実であると認定されるためには少なくとも二人の証人が必要とされる、ということであった。しかし彼らは必ずしもモーセの律法を完全に守ろうと支持していたわけではない。そのように見せかけているだけで、彼らの本当の意図は後で明らかになる。
 - b. 40節では彼らがイエスを殺そうとしていること、またその理由がわかる。44節でイエスは、彼らの父は悪魔でありその欲望を成し遂げたいのだと明らかにされる。
 - c. イエスがこのような大きな宣言をされる時は、ただこの世的に相手の策略をくらまそうとしているのではない(48節でイエスの敵がそうしているように)。イエスは彼らがただ単に欺かれ、目が見えず、迷っているとおっしゃっているだけでなく(それも事実であるが)、彼らは悪魔の手下だと宣言されている。
3. イエスは答えて、彼らに言われた。「もしこのわたしが自分のことを証言するなら、その証言は真実です。わたしは、わたしがどこから来たか、また、どこへ行くかを知っているからです。しかしあなたがたは、わたしがどこから来たのか、またどこへ行くのか知りません。」(8:14)
 - a. イエスはすでにご自身の代わりに証言をした人たちがいると明確にされる(博士たち、エリザベツ、マリア、シメオン、アンナ、野の羊飼いたち、バプテスマのヨハネ)。しかしたとえ証言しているのがイエスだけだとしてもそれは有効である。というのは、イエスは神から出ているのでありその証言は人間の基準に当てはめられるものでないからである。
 - b. 「わたしは、わたしがどこから来たか、また、どこへ行くかを知っています。」イエスはこの世の出発点や目的地を言っているのではない。イエスのご自分が神の右の御座から来られ、神の子としてそこに戻られることを指している。
 - c. イエスを批判する者たちは目が見えていないため、イエスがおっしゃっていることが理解できない。その原因は彼らのさばきの基準にある。
4. あなた方は肉によってさばきます。わたしはだれをもさばきません。しかし、もしわたしがさばくなら、そのさばきは正しいのです。なぜなら、わたしひとりではなく、わたしとわたしを遣わした方がさばくのだからです。(8:15-16)
 - a. 私たちもさばく基準を見直す必要がある。この場合はイエスを批判する者たちの、神や信仰心がどのような形であるべきかという考え方の基準である。
 - b. イエスの基準は父なる神が設定されたものに基づいている。私たちがさばきの基準を見直す時、どこに基準を据えているかが見えてくるかもしれない。もしかしたら私たちが、どこに、そして誰に基準を置いてさばいているかに気付いて驚くかもしれない。
 - c. イエスは言われた、「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」